

歌舞伎台帳『魁源平躑躅』と コミュニティアーカイブ

岐阜女子大学 木村 涼

はじめに

- ・天保12年(1841)閏正月19日より, 江戸中村座にて大切(おおぎり)の芝居に「魁源平躑躅」が上演
- ・本来ならこの年は, 河原崎座に出勤しているはずの五代目市川海老蔵(=七代目市川團十郎)が「スケ」として出演

- 五代目海老蔵は、お家芸の荒事、時代物、世話物、和事、所作事など、どんな役柄でも抜群の存在感
- 「魁源平躑躅」にて、当たり役の熊谷次郎直実を海老蔵が勤める

- 閏正月7日に徳川11代将軍家斉が没す→江戸三座の芝居興行は「永の御停止」→「魁源平躑躅」も上演日数わずかにして閉幕
- 本報告では、台帳『魁源平躑躅』（一般財団法人宮本記念財団所蔵）の形状や性格を確認→江戸歌舞伎にて上演された芝居台帳が、山梨地域へもたらされ、明治34年（1901）に地元の俳優によって用いられた過程を踏まえ、コミュニティ（地域）アーカイブの有効性について検討

歌舞伎台帳『魁源平躑躅』の形状

体裁

- 縦帳で、法量は、縦27.0糎 × 横15.5糎
- 全丁数に関しては、表紙、表紙裏、1丁目表から54丁目表、裏表紙
- 表紙裏、54丁目表には何の記載もない

表紙の情報

- 表紙には,「当ル辛丑の出来秋狂言 紙員
五十五枚 魁源平躑躅(さがけさきわけつゝ
じ) 扇屋の場」
- 天保12年(江戸中村座上演)と明治34年(山梨
地域での上演)の干支は共に「辛丑」
- 「出来秋」= 稲の良く実った秋の頃

- 当台帳の配役は江戸中村座のものであるが、「出来秋」とあるように時期的に見ても、天保12年閏正月に中村座で上演された時の台帳ではない
- 江戸の台帳を基に、表紙・裏表紙に手を加え、山梨地域で書き写された台帳

- 演目名称は「さきがけげんぺいつつじ」であるにも関わらず，当台帳には，わざわざ「さきがけさきわけつつじ」とルビ
- 役者名は二段に記載

上段の役者及び配役

- 三代目尾上栄三郎一扇折小萩実ハ無官の
太夫敦盛
- 嵐冠十郎一扇屋上総
- 四代目小佐川常世一上総女房お此
- 1人とはして、瀬川菊寿一扇折人おきく

- とばした箇所には富之助と記載
→富之助は、上総娘桂子を勤めている
- 江戸での天保12年閏正月19日からの
「魁源平躑躅」の舞台において、富之助
という役者はいない
- 富之助にあたる役者→中山登美三／
登美三（富三）が上総娘桂子を勤める

下段の役者及び配役

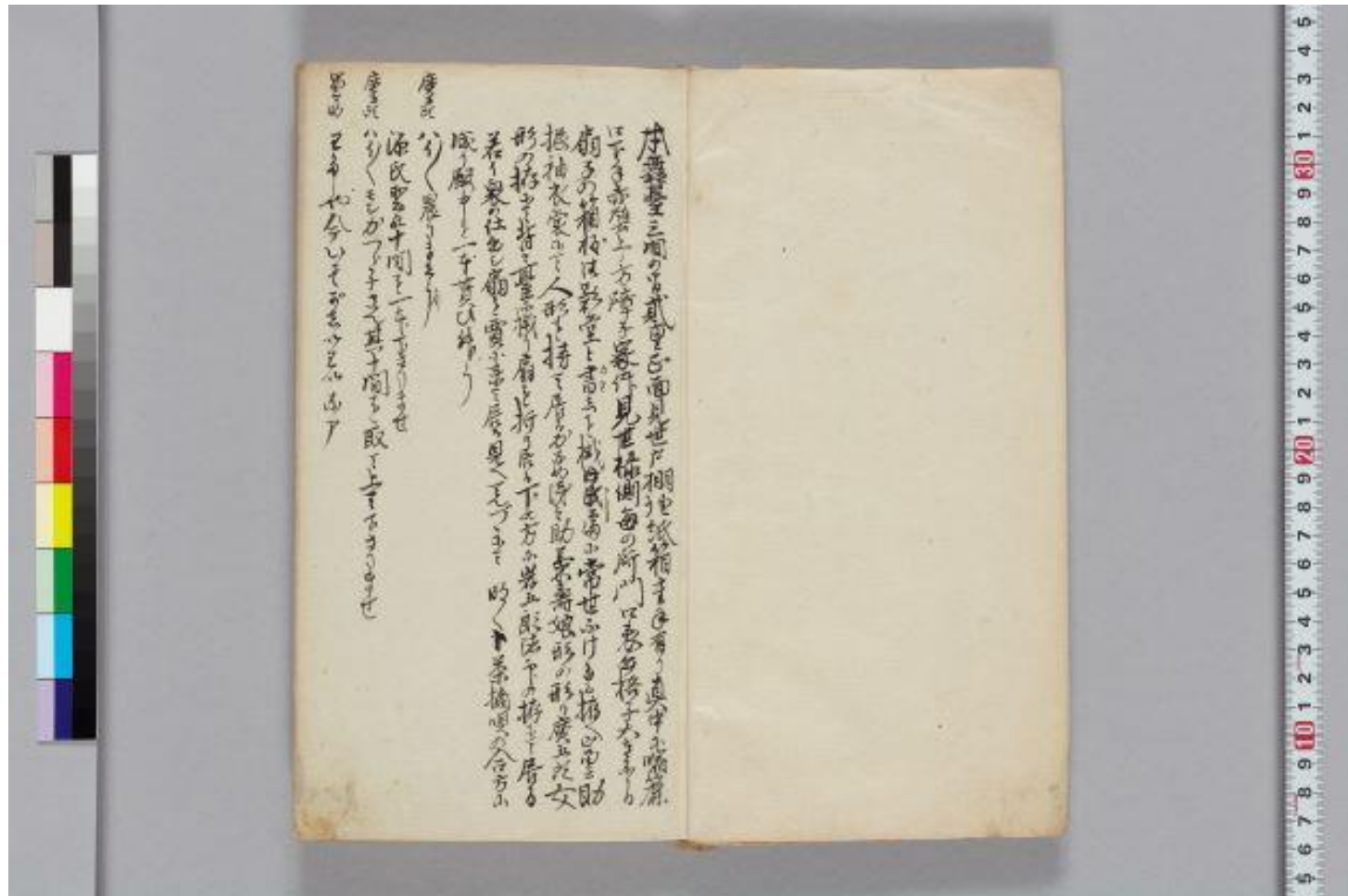
- 海老蔵一熊谷次郎直実
- 中村鴈蔵一姉輪平次
- 中村鴈作一堤軍次
- 市川廣五郎一扇折人お末
- 尾上岩五郎一木鼠忠太
- 1人とはして、中村鵲蔵一百姓音作

- とばした箇所には村蔵と記載→村蔵は庄屋を勤める
- 富之助同様、江戸の芝居にては、村蔵という役者はいない
- 村蔵にあたる役者は中村峯蔵→峯蔵が庄屋空郎兵衛を勤める

- 2人の役者及び配役が江戸の芝居と異なる
→ 当台帳を書き写した人物が単に役者名を間違えたのか、元々、天保12年の芝居台帳に富之助や村蔵と記してあったのか、判断できる根拠は見当たらない

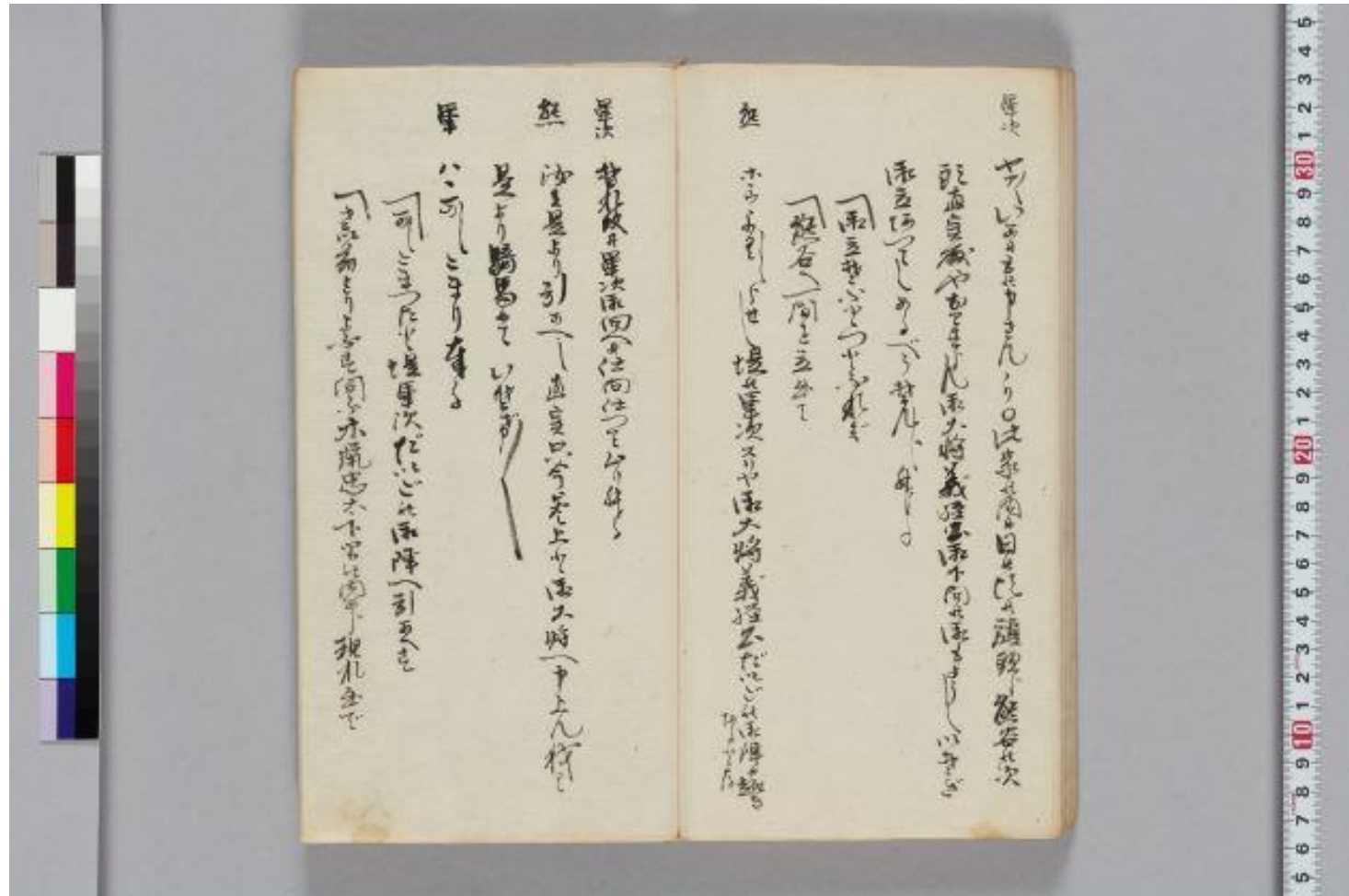
台帳本文の形式

(図2:1丁目表)



- 1丁目表は、場面の情景や大道具の配置の仕方などを指示する舞台書きに始まる
- 続いて役者の台詞が記載
- 江戸の台帳は台詞の頭に役者の名が記されるのが定式

(図3:46丁目裏・47丁目表)



- 46丁目裏から、台詞の頭に記されるのが役者名ではなくなる→配役名が記される
- 熊谷次郎直実ならば「熊」、堤軍次ならば「軍次」という様に役名で記載
→どういう理由があって、1冊の台帳の中でこのような変化が生じたのかは不明

裏表紙の情報

(図4:裏表紙)



- 裏表紙「明治参拾四年十月十七日
深山筆記ス」
- 次の行の上部に「芦沢花枝 方 借本筆記」
- 下部に「山梨俳優 【三升の中に壽の紋】
市川壽三郎」と記載

- 当台帳は、芦沢花枝なる者が所持
- それを深山という人物が借り受け書写
- 山梨俳優の市川壽三郎を中心とする
一座→深山の書写した台帳を使用した
可能性が高い

江戸から山梨へ伝播した経緯

- ・市川壽三郎，芦沢花枝や深山なる人物の具体的な素性→現段階において不明
- ・市川壽三郎→【三升の中に壽の紋】を使用／市川團十郎家の定紋である「三升」を意識

- 海老蔵は、中村座にて自身の勤めた熊谷次郎直実の役を凡そ半年後の天保12年6月18日から7月5日まで甲州地域を代表する芝居小屋、亀屋座（現山梨県甲府市）にて披露
- この時の演目名称は「源平咲分つゝし 扇屋之段」→配役は海老蔵の熊谷次郎直実以外、中村座とは異なる

- 7月5日に亀屋座興行が終了→海老蔵一行は同月21日に信州入り
- 海老蔵一行を招待した川路村(現長野県飯田市)の庄屋関島記一の元に同月24日に到着→川路村にて芝居興行を翌8月2日より13日間開催
- この芝居興行でも「魁源平躑躅 五條坂扇屋の場」が上演→川路興行の配役も海老蔵の熊谷次郎直実以外は中村座や亀屋座とは異なる

- 海老蔵が組んだ一座は，天保12年には「魁源平躑躅」を江戸，甲州，信州にて3回上演
- 3箇所ともに出演し，同じ役柄を勤めている役者は唯一海老蔵のみ

- ・江戸で使われた「魁源平躑躅」の歌舞伎台帳→海老蔵が甲州亀屋座へ出演した時持参→何らかの事情によって甲州地域の人の手に入った可能性

- 当台帳は海老蔵(亀屋座)→芦沢花枝
→深山→市川壽三郎へ継がれる
- 山梨は、明治期に劇場が20近く濫立
→芝居の盛んな地域
- 甲州地域で江戸でも名の知れた亀屋座は、
明治16年(1883)に名称を若松座と変更
→市川壽三郎等が芝居を上演した劇場は、
山梨地域と言っても亀屋座でないことは
年代からみても明白

- 裏表紙の「明治参拾四年十月十七日」と表紙の「出来秋狂言」という記述→甲州地域での芝居に用いられた
- 明治34年10月17日という日→深山が台帳を筆記した日か芝居が開催された日なのか判断がつかない

- ・天保12年閏正月19日，江戸中村座にて上演された「魁源平躑躅」の歌舞伎台帳
- 60年の時を経て，山梨俳優市川壽三郎の手に渡り山梨地域の芝居興行に活用
- 1冊の歌舞伎台帳が，コミュニティアーカイブとしての価値を十分に発揮した事例

おわりに

2つの課題点

- ・芦沢花枝，深山なる人物，市川壽三郎という「山梨俳優」について具体的な人物像を明らかにする
- ・芝居を上演した山梨地域の場所あるいは芝居小屋（劇場）についても究明

今後の展望

- ・江戸の芝居が江戸時代から明治時代にかけて山梨地域に伝播してきた事実→当台帳がコミュニティ(地域)アーカイブとして十分な機能を果たし、山梨の芝居や俳優、観客、地域社会に貢献
- ・江戸の台帳が様々な経緯を経て、現在まで残されているような例→他地域においても少なからずあると予測

- これらを丹念に掘り起こす→コミュニティアーカイブの有効性を検討→デジタルアーカイブ研究の一層の進展につながる

参考文献

- [1] 天保12年閏正月中村座「魁源平躑躅」. 絵本番付（演劇博物館所蔵口23-1-689）.
- [2] 富澤慶秀. 藤田洋監修. 最新 歌舞伎大事典. 柏書房. 2012,7
- [3] 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編.江戸芝居番付朱筆書入れ集成.早稲田大学出版部. 1990,2,p.16-17.
- [4] 岐阜女子大学 デジタルアーカイブ研究所編. 地域文化とデジタルアーカイブ. 樹村房. 2017,11
- [5] 古井戸秀夫.鶴屋南北未完作作品集第一巻. 白水社. 2021,6

- [6] 木村涼. 七代目市川團十郎と甲州亀屋座興行. 演劇博物館グローバルCOE紀要演劇映像学2010第4集. 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館. 2011,3, p.105-140.
- [7] 菊池明. 林京平. 信州川路と市川海老蔵. 演劇研究 第6号. 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館. 1973,4,p.1-33.
- [8] 木村涼. 五代目市川海老蔵の信濃国川路興行関連資料のデジタルアーカイブについて. 岐阜女子大学 デジタルアーカイブ研究所 テクニカルレポート2017 Vo2. No.2.岐阜女子大学.2017,3,p.12-13.
- [9] 山梨県. 山梨県史 資料編19 近現代6. 山梨県. 2002,5,p.464-466.